

## コラム 73 — 沖縄戦における軍民協力

沖縄戦は「鉄の暴風」と呼ばれる激しい艦砲射撃で始まった。日本軍の反撃戦力を削ぐため、上陸に先立って地形が変わるほどの砲撃を加えたのである。その激しさはまるで「田畑を耕す」ようであったと言われております。

県庁のある沖縄本島（中部および北部）への上陸は1945(昭和20)年4月1日。未明から夜明けにかけて戦艦10隻等から計算不能なほどの砲弾が海岸線に打ち込まれた。日本軍は水際で追い落とす作戦を断念し、持久作戦に変更していたので、上陸は抵抗を受けることなくできた。拍子抜けした兵士たちは、上陸はまるでピクニックのように感じた。

4月1日なのでエイプリル・フールではないかと思ったそうであるが、やがて進攻するにつれ、地の利を生かした執拗な抵抗にてこずらされることとなります。そんな中、アメリカ第10軍司令官（沖縄上陸軍最高司令官）バックナー中将が戦死する。アメリカ軍史上、最高位の階級での戦死者と言われております。

日本は、沖縄地上戦を予期して第32軍を増強していた。沖縄本島に3個師団、1個旅団を配備、宮古島などにも1個師団、1個旅団を展開させたのであります。県民は台湾や本土（九州）へ疎開させ、地上戦に備えた。増強のきっかけは、南太平洋から台風のように北上してきたアメリカ軍の猛攻によって、1944(昭和19)年7月、ついに絶対国防圏の要であるサイパン島を失陥したことであります。サイパン島は南マリアナ諸島の1つであり、ここを失うと日本全土がB-29長距離爆撃機の脅威にさらされることになるため「絶対に守り抜かなければならない」という島の1つでした。のちに広島、長崎に原爆を投下した爆撃機が発進したのも南マリアナ諸島の1つ、テニアン島です。南マリアナ諸島は本土防衛にとって重要な意味を持つ島であったのです。

沖縄第32軍の増強は敵上陸時に主力を機動させて決戦をいどみ、逆転勝利は叶わなくとも、足止めを強制し、痛打を浴びせることにより休戦、講和のきっかけを作り出したいという願望もありました。

しかし、1944(昭和19)年10月のフィリピン・レイテ島の戦いのために台湾から兵力の一部を援軍として転用せざるを得なくなり、その穴埋めに沖縄の精鋭師団（第9師団）が玉突き式に台湾に転用されることになりました。台湾は日本にとって南方との補給線でもあり、占領された場合、中国南部上陸の足がかりを与えてしまうという事態も考えなければならなかったのです。

精鋭師団の台湾転用によって沖縄第32軍の戦力は30%減となり、作戦方針も大転換を余儀なくされた。持久抵抗戦に切り替え、部隊配置を見直し、戦闘方法も見直さざるを得なくなったのです。1944(昭和19)年11月、アメリカ軍上陸の4か月前のことです。

こうして、沖縄戦における日本側の兵力は、現地召集の予備役・補充兵役等を含めて約116,000人になりました。これで、548,000人のアメリカ軍に立ち向わざるを得なくなったのです。日米の兵力差は1:5倍弱、兵力の劣勢を補うため沖縄県の青壮年男子の召集のほか、旧制中学校生徒からなる「鉄血勤皇隊」、女子生徒を衛生要員とする「ひめゆり学徒隊」「白梅学徒隊」等も組織せざるを得なくなったのである。生徒たちの活躍ぶりは、本やテレビ、あるいは修学旅行や観光での戦跡訪問、資料館見学などを通して多くの人に知られているとおり、思春期の生徒たち、特

に女生徒に生涯忘れることのできない過酷な体験をさせることになったのであります。「がま」と呼ばれる洞窟の中での麻酔薬なしの外科手術、殺してくれと叫ぶ兵士、攻撃が止む夜間、切断した手足などを壕の外の指定された場所へ運ぶのです。強固な使命感なくしてできる仕事ではありません。純粹、純心な少女たちの健気な奉仕ぶりは、これぞまさに「やまとなでしこ」だと思えます。

沖縄戦の日本側の犠牲者は約 20 万人。軍人約 10 万人、民間人は約 10 万人とされています。軍と民が一体となって戦ったことを物語る数字です。これを裏付けるのが、海軍根拠地隊司令官 大田實少将（写真）が 1945（昭和 20）年 6 月 6 日に大本営海軍次官宛に発信した電文である。大田少将の海軍次官宛の電文は次のような書き出しになっています。



大田實海軍少将

「沖縄縣民ノ實情ニ関シテハ縣知事ヨリ報告セラルベキモ縣ニハ既ニ通信力ナク第 32 軍司令部又通信ノ餘力ナシト認メラレルニ付 本職縣知事ノ依頼ヲ受ケタルニ非ザレドモ現状ヲ看過スルニ忍ビズ之ニ代ッテ緊急御通知申上グ」。そして、「沖縄島ニ敵攻略ヲ開始以來 陸海軍方面戦闘ニ専念シ県民ニ関シテハ殆ド顧ミルニ暇ナカリキ」と反省し、アメリカ軍上陸後の幾多の困難のなかでの沖縄県民の献身的な協力と筆舌に尽くしがたい苦難を具体的に述べたあと、「沖縄縣民斯克戦ヘリ 縣民ニ対シ後世特別ノゴ高配ヲ賜ランコトヲ」と結んでいる。大田少将は 6 月 13 日、豊見城の海軍壕で自決しました。

復帰後の沖縄で、この電文が額に入れ掲示されているのを各地で散見され、大田少将に対する尊敬の言葉も耳にしました。

大田少将と「肝胆相照らす」仲であったと言われている、電文で発せられた県知事も、県民の命を守るため砲弾雨の中を東奔西走しました。当時の県知事は島田勲（しまだ あきら）44 歳、中学・高校・大学時代に野球選手として活躍したスポーツマンです。沖縄県最後の官選知事でありました。大阪府内務部長の職にあった島田は、1945（昭和 20）年 1 月、米軍の上陸必至とみられていた沖縄への赴任を打診されたとき周囲は辞退、辞任を勧めたが、「自分が行かなければほかの誰かが行かねばならない。俺は死にたくないから、誰か代わりに行ってくれとは言えん」と任地に向かったのです。着任後、安全な北部への県民の疎開、食料の確保と分散等に精力を注ぎました。

その島田知事も 6 月 26 日、摩文仁の壕を出た後消息を絶ったままです。第 32 軍司令官および参謀長自決の 3 日後でありました。遺体は今も発見されておらず、摩文仁の丘の「島守の塔」は島田知事以下県職員 453 名の慰霊のために、県民の浄財によって建てられたものであります。また、高校野球夏の県大会で沖縄を制した高校には「島田杯」が授与されており、知事がどんなに県民に敬愛されていたかが理解できます。

沖縄戦において、上陸したアメリカ軍に痛打を与え、休戦、講和に持っていくという願望は実現できなかったが、軍民一体となって頑強に戦闘を続けた日本人に対して、アメリカ軍の将兵は、日本本土の複雑な地形と天皇をいただく一億一心の団結と敢闘精神に思いを致し、本土上陸作戦の多難さを痛感させたといえます。

さて、昭和天皇は、戦後焦土と化した全国を巡り、国民を励ましたいと強く希望され、当時アメリカ軍の施政下にあった沖縄を除く全国各地を巡幸して復興に励む国民と親しく言葉を交わされました。昭和天皇にとって、戦後も長くアメリカ軍の施政下にあった沖縄を行幸することは長年の悲願でした。この昭和天皇の長年の悲願がようやくかなった1988（昭和63）年に、天皇は重い病に倒れてしまいました。このとき、昭和天皇は医師に対して「沖縄を行幸するのはもうダメか」とつぶやいたといひます。

昭和天皇が、沖縄戦において亡くなられた沖縄県民への痛哭の思いを寄せられた御製を一首紹介します。

### 「思わざる 病となりぬ沖縄を たづね果さむ つとめありしを」

昭和天皇のお気持ちが伝わってまいります。

ところで、硫黄島では島も小さく人口も1,000人程度であったので、地上戦に先立って全員を疎開させることができたが、沖縄戦ではそうはいかず、県民を交えての戦闘となりました。そのような戦闘は、我が国の近代戦においては考えてもみなかったことであります。

しかし、今日の日本においては、専守防衛を国是とする以上、究極の戦場は「本土」ということになります。沖縄戦を教訓にすると、住民対策はどうあるべきか、国家としての課題は多く、困難かつ複雑であると考えます。